て右水腎症および拡張した尿管を圧排する長径82㎜の腫瘍が認められ，CTおよびMRIにて腫瘍は後腹膜に存在し，下大静脈と右尿管の間に位置していた。開腹手術を施行。腫瘍は十二指腸および右腎と強固に癒着し，根治目的に全胃温存膵頭十二指腸切除，右半結腸切除，右腎摘出術を施行。病理組織学的には平滑筋腫であった。後腹膜平滑筋腫は稀であり文献的考察を加えて報告した。

7．食道静脈瘤治療におけるアルゴンプラズマ凝固法（APC）による地固め療法の有用性

奥川英博，菊池保治，宮川　薫
井上博喜，渡辺哲郎，大野　泉
村岡秀樹，篠崎正美，後藤信昭
（沼津市立）

今回我々は食道静脈瘤の再発予防としてアルゴンプラズマ凝固法を地固め療法に応用した。対象22例中2例に再発を認め累積非再発率は2年で89.9％だった。APCは粘膜層及び粘膜下層に線維化を生じさせ再発を予防し有用だった。

8．止血が困難であった十二指腸球後部潰瘍の1例

伊東賢一，野村裕正，倉田秀一
吉田　有　（下都賀総合）
門倉健一，三ツ橋茂雄，嶋崎勝典
（同・脳神経外科）

内視鏡的に止血が困難で，IVRが奏効した十二指腸球後部潰瘍の1例を経験した。下血を主訴に入院となった患者に緊急内視鏡を施行し，上記出血部位を特定してクリッピングを行ったが，完全な止血が困難で下血が持続した。動脈造影では腹腔動脈ではなく，上腸間膜動脈分枝からの出血が確認されたため，同部位にmicrocoilを留置して止血に成功した。

9．当科で経験したGIST症例の検討

鈴木拓人，斎藤博文，北　和彦
木村道雄　（千葉市立海浜）
太枝良夫，磯野敏夫，吉岡　茂
若月一雄　（同・外科）
菅野　勇　（帝京大市原・病理部）

近年消化管の非上皮性腫瘍の病理診断としてGastro-intestinal stromal tumor（GIST）としての報告が増加している。今回，当科で経験したGIST 12例をまとめた。

GISTとは平滑筋，神経系への分化を示さない，紡錘型細胞からなるc-kit陽性の間葉系腫瘍である。多くは再発なく，摘出術により根治可能であるが，術後6年以上経過してから多発性の肝転移を来たすものもあり長期観察を要す。

10．麻痺性イレウスにて発症した先端巨大症の1例

沖津恒一郎，池尾靖人，栗田純夫
木村雅樹　（国保軽井沢）

今回我々は麻痺性イレウスにて発症した先端巨大症の1例を経験した。入院時現症は発熱，筋性防御を認め，腸音を認めなかった。腹部X線にて腸閉塞を認めイレウスと診断した。イレウスの原因は不明だったが顔貌に特徴的所見を認め先端巨大症が疑われた。各種ホルモン検査・画像所見より先端巨大症の確定診断を得た。長期間放置により麻痺性イレウスを発症したと考えられ，イレウスの原因疾患として先端巨大症を考慮すべきと思われた。

11．当院における食道癌放射線化学療法の検討

須藤研太郎，駒　嘉宏，瀬座文香
酒井裕司，永嶋文尚，佐藤恒信
藤森基次，早坂　章，鈴木紀彰
森　博通，福山悦男（君津中央）

近年，食道癌治療において放射線化学療法は外科手術に匹敵する治療成績が示されておりその地位を確立しつつある。今回我々は十分なインフォームドコンセントのもと承認を得た16名に放射線化学療法を施行し，有用性を検討した。

12．当院における進行胃癌に対するTS-1/CDDP併用療法の現況

酒井裕司，藤森基次，瀬座文香
須藤研太郎，駒　嘉宏，永嶋文尚
佐藤恒信，藤森基次，早坂　章
鈴木紀彰，森　博通，福山悦男
（君津中央）

抗癌剤の治療効果が上昇し，化学療法が見直されている現在，当院において手術不能進行胃癌症例に対し，TS-1＋CDDP併用療法を施行した。1コース終了ごとに上部消化管内視鏡，上部消化管造影，腹部超音波，腹部CT検査，採血，臨床症状の改善等の効果判定を施行し今後の治療方法として検討してみた。